



## 掃除は人を磨く



最近、嫌な光景を見ました。

歩きながらタバコを吸い、その吸い殻をぽいっと道路に捨てる人、信号機で止まっている間に車窓から吸殻を捨てる人もいました。また、路地や空き地に、空き缶やコンビニで買ったものと思われるゴミがちらかっている光景を見ることがあります。このような人たちの公德心はどうなっているのでしょうか。逆に気持ちの良い光景も見られます。

片手にゴミ袋を持ち、道路に落ちている空き缶やゴミを黙々と拾っておられる姿を見ることがあります。また、ある会社の前の道路で、社員と思われる人なので、数人がほうきやちり取りをもって、歩道の枯れ葉や吸い殻等のゴミを拾っておられる姿が見られます。そのような光景を見ると清々しい気持ちになります。このような光景は、私が職場に通う道筋だけでなく、防府市内のいろいろな場所で見られているのでしょうか。今は、日本を訪れる外国の人は少なくなったのですが、コロナ前に日本を訪れていた外国の人たちが一応に、「日本の街はきれいだ」と言われていたことを、嬉しく思って聞いていました。

「掃除が人を磨く」という話を紹介しましょう。

釈尊の弟子の中に、リハタとシュリハンドクという兄弟がいました。兄は優秀な人でしたが、弟のハンドクは自分の名前さえ覚えられない記憶力の悪い男でした。なにより辛いのは、お釈迦様の説法を聞いたそばから忘れてしまう。

そのことを悲しんで泣いていると、通りかかった釈尊が一つの言葉を教えます。「塵を払い、垢を除かん」、この言葉を繰り返し唱えながら精舎の掃除をするように命じます。仕事を与えられて喜んだハンドクは、来る日も来る日も「塵を払い、垢を除かん」と、なんとかの一つ覚えで唱えつつ掃除をしているうちに、ついに悟りをひらいた、という弟子です。ハンドクが亡くなって彼の墓のまわりに茗荷（みょうが）がいっぱい生えてきたとされています。

お釈迦さまは、掃除が人を磨くものだとして知られたのでしょうか。

皆さんは、かつて学校で自分たちの使った教室、トイレ、校庭等の掃除をされたことを覚えていらっしゃるでしょう。今は、無言清掃に取り組んでいる学校もあり、子どもたちは、しゃべらずに黙々と掃除する光景も見られます。「掃除活動」は学校にとってとても大切な教育活動の一つなのです。このように、私たち日本人は、子どものころから掃除をするという習慣が身についています。

「環境が人をつくる」という言葉もあります。きれいな環境で生活するのと汚れた環境で生活するのでは、気持ちに大きな違いがあります。きれいな環境のもとでは、人は良い考えをもちます。私たちの街をきれいに保ちたいものですね。

余談ですが、「茗荷を食べると物忘れがひどくなる」といわれますが、それは、この話から出ているのでしょうか（決してそんなことはないのですが）。茗荷は、みそ汁の具、天ぷらや酢の物にしてもおいしくいただけます。プランターでも簡単に栽培できますよ。

（文責＝青少年育成センター指導員 藤村）